

キラリ! 施設紹介

Vol.34

特別養護老人ホーム 椿野苑 (岐阜県山県市)

びとつの命をとともに生きる“施設をめぐる” ショートステイでの看取りを実施

ショートステイにおける看取りの経過

椿野苑のショートステイにおける看取りの対象者となったのは、88歳の男性で要介護4、意思疎通可能で認知症の症状はありませんでした。平成24年1月下旬から利用を開始し、3月末には利用延長、4月に入ると肺炎腫瘍により入院加療を行うようになります。同月20日に利用を再開、5月17日に長期利用を開始。同月31日には施設内で点滴を開始しました。

家族としては、妻は「入院しても自分で付き添うのは無理で、先生にお任せしたい」、嫁は「ショートステイでは見てもらえないですよね」という声が出ていました。一方、本人は状態の悪化に伴い気力も低下し、気持ちを折えられなくなっていました。スタッフとしては「この状態では入所の人なら看取りの対象だけど」という状態にまでなりました。

そこで、介護支援専門員にご家族の意思確認と今後の方向性を主治医と検討してもらおう、職員からアプローチしました。

主治医の「入所の人と同じように看取りします。私が最期まで責任を持ちます」という意見あり、6月17日に看取り介護を開始しました。

個室対応、ご家族用のサブアヘッドを設置し、30分おきに状態観察と記録を行い、体位交換、ストレッチャー際、主治医の回診やバイタルサイン測定、点滴、必要時の吸引といった医療面でのフォローも行える体制を整備。運営会議には、施設長、副施設長、主任生活相談員、看護主任、各エリア長および副エリア長、主任介護支援専門員が出席しました。入所とは違い、日々変わる利用者の対応に加えて、担当職員だけでなく、他のチームスタッフも連携を図りました。施設看護師が関わることで、医療面のフォローがなされ、ご家族も安心できていました。

そんななかでショートステイ責任者より、本人に「とにかく家に帰りたい」という願望があることが、会議の席上で伝えられます。家族の不安要因に対して一つひとつ解決策を提案し、同意を得られたため、主治医に確認、許可を得ます。本人にその旨を伝え、家に帰ることを望むことが確認されたところ、うなずかれます。こうして、一時帰宅が決定しました。

6月22日に、椿野苑の送迎用バスを用いて帰宅しました。帰宅から3日後、咳痰の自力嚥下が困難になり、適宜吸引が必要な状態に。7月19日、ショートステイのベッドで逝去されました。

岐阜県山県市にある特別養護老人ホーム椿野苑(社会福祉法人同朋会・井上祐子施設長)が力を入れているのは「看取り介護」。最期の瞬間を迎えるまでの時間を、利用者がいかにして心穏やかに、有意義に過ごせるかを考えながらケアをしています。平成24年に、利用者の家族からの強い要望にこたえるため、開設以来初めとなるショートステイでの看取り介護を実施。利用者の家族や医師、施設職員が連携を図り、利用者一人ひとりに合わせて、きめ細かい介護の提供をめざしています。

長年の経験を活かし 地域の声に応える看取り介護

四季折々の自然の移ろいを身近に感じることができ、山麓に平成8年、特別養護老人ホーム椿野苑はオープンしました。従来型特養60床、地域密着型特養20床、短期入所生活介護(ショートステイ)20床で構成され、定員25人のデイサービス、居宅介護支援事業所など、幅広いニーズに対応する施設です。



社会福祉法人同朋会
特別養護老人ホーム椿野苑
〒501-2101
岐阜県山県市大倉3615-1
TEL: 0581-22-6001



施設内には機械浴と一般浴の2種類を用意。壁には岐阜城や世界遺産の白川郷の家造り、名産の岐阜提灯、織姫などがタイルで描かれ、利用者の目を惹きつけている



廊下は壁と壁の一部に木目をあしらうことで、温かい雰囲気を演出。各居室の入り口に設けられた案内サインにもこだわっており、たとえば理美容室では、赤・青・白の三色縞模様のサインポールをあしらったデザインになっている



井上祐子施設長

「ひとつの命をともし生きる」を理念に、昭和61年10月に設立。椿野苑のほか、障害者支援施設（自閉症成人施設）「伊自良苑」、障害者総合生活支援センター「クロス」、東濃自閉症援助センター「かさはら」、障害福祉サービス事業所「ワークス伊自良」、障害者支援施設（高齢者施設）「生活の家桜美苑」、養護老人ホーム「美山荘」、保育園2カ所など、地域に密着した幅広い事業を展開しています。

「椿野苑では、開設当初から希望があれば看取り介護を実施していました」と話すのは、井上祐子施設長。開設当時は看取り介護を行っている施設はほとんどありませんでしたが、看取り介護を要望する声は多かったです。「なかには、本当は自宅に帰りたいけれど、家族や周囲の人を気遣って『施設にいたい』と話をされる方もいらっしゃいます」。椿野苑では、そのような利用者の心情をくみ取り、じっくりと信頼関係を築き上げてい



掲示物は、目線の高さや位置など見やすさを配慮。職員紹介では職員の顔写真を大きく掲載し、利用者はもとより、家族や地域の方々に覚えてもらえるように工夫している



利用者の要望にこたえ、ショートステイでの看取りを実施



利用者の笑顔があふれていることが自慢の1つ。取材当日、カメラを向けられると利用者が思わずピースサインを送る場面が見られた



中直に置いたユニット棟



花を植えたり、作物を栽培するなど園芸法が盛んに行われている。小さなものを受でる行為には笑顔を引き出す効果が期待できる



平成24年9～10月にかけて開催された「さぶみ清流団体」での聖火リレーに参加。松明を持つ利用者の表情は真剣そのもの



平成25年度全国老人福祉施設研究会議(沖縄会議)の表彰状と「月刊老協」に掲載されたときの記事を表示。職員はこれを見ながらモチベーションが高まるそうです



平成25年度全国老人福祉施設研究会議(沖縄会議)の表彰状と「月刊老協」に掲載されたときの記事を表示。職員はこれを見ながらモチベーションが高まるそうです

く対応で、真の意味で利用者に満足してもらえるように心がけています。

周囲とのチームワークを強化し 利用者一人ひとりに合わせたケア展開

その取り組みの一つが看取り介護の体制強化です。「利用者の家族はできれば自宅です、自分たちで看取りたいという方がほとんどです」と、井上施設長。しかし、家族が全員高齢者である場合など、どうしても自宅での看取りが行えないことが多いのが現状です。そのようなケースでも家族の支えになるのが当施設の役割と井上施設長は強調しています。

取り組みのきっかけは昨年、「最期に一度でいいから自分の家に帰りたい」というショートステイ利用者や家族からの強い要望でした。

幸いなことに、椿野苑ではこの希望に応えられる体制を迅速に整えることができました。井上施設長は、帰宅をさせる際には同施設の車に見護師と介護職を同乗させ、自宅でバイタル測定や排泄のサポートをすれば、望みをかなえられると判断。この利用者が帰宅できたのは1泊でしたが、「お迎えにうかがった際、大変満足そうな表情をされていたのが印象的だった」との報告を受けました」と、井上施設長は振り返ります。後に椿野苑で安らかに息を引き取られました。

ショートステイでの看取りは、主治医やケアマネジャーといったさまざまな関係者と連



● FILE 16 / 看護師長

宇野美穂さん

うの みほ ● 病院勤務。在宅・訪問看護などを経て椿野苑に入職。看護歴22年の経験を活かした、きめ細やかなケアを心がける。現在は看護部長として、他職種との連携にも力を入れている。

取り組んでいます。

椿野苑に入職するまでは、病院勤務と在宅・訪問看護に15年ほど携わってまいりました。今の仕事が病院での看護の仕事と大きく違うのは、一人ひとりのご利用者とじっくり向き合うことができる点です。ご利用者が元気に在宅復帰できるよう、リハビリのスケジュールや食事のバランスなど、介護職員とも密に連携をとりながら、職種を超えてトータルにご利用者にかかわることができるので、とてもやりがいを感じています。ショートステイでの看取りには課題もありますが、ご利用者に心から満足していただけるよう、これからも真摯に

ご利用者の一人ひとりと
じっくり向き合い
生活をトータルにサポート



● FILE 15 / 介護福祉士・ショートステイエリア長

田中真由美さん

たなか まゆみ ● 身体障がい者施設で働いた後、椿野苑に入職。勤続9年目。現在はショートステイのエリア長として介護チームをリードしている。柔らかな印象の笑顔が特徴で、利用者様にもより職員からも信頼が厚い。

ご利用者と接していきたいですね。

ショートステイを利用される方の多くは、普段ご自宅介護を受けておられます。特に初めて利用される方は、不安でいっぱいだと思います。そういった方々に日頃から積極的な声をかけ、少しでも不安を和らげていただくことが私の役目だと捉えています。帰宅されるご利用者に笑顔で「あなたの顔を見ると安心する」「また会ってお話ししたい」などと声をかけていただいたときは、「この仕事をやっていてよかった」と心から思います。これからも心を込めて、

シ
は、普段ご自宅介護を受けておられます。特に初めて利用される方は、不安でいっぱいだと思います。そういった方々に日頃から積極的な声をかけ、少しでも不安を和らげていただくことが私の役目だと捉えています。帰宅されるご利用者に笑顔で「あなたの顔を見ると安心する」「また会ってお話ししたい」などと声をかけていただいたときは、「この仕事をやっていてよかった」と心から思います。これからも心を込めて、

連携を図る必要があります。比べてハードルが高くなります。

一周忌が過ぎ、スタッフがグリーンケアのために家族に会った際、一時帰宅できたことにに対し本人はとてうれしそうでした。ありがとうございます」と感謝の言葉をもらったそうです。スタッフに「自分たちの判断が単なる自己満足ではなく、ご家族にも本人にも満足していただけたのだと実感しました」と報告を受け、井上施設長は、椿野苑の存在が人々の役に立っていることに誇りとやりがいを改めて感じたそうです。

同施設では現在、看取り介護のほか、口腔ケアや認知症ケアなどにおいて質の高い介護をめざしています。今年から、「水分・食事・排泄・運動」のパラメータを考慮しながら利用者の自立を支援する科学的介護にも本格的に着手。ただし、井上施設長は「一人ひとりに合ったペースでサポートしていきたい」と、あくまでも利用者の意思を尊重する考えです。

「今後は、高齢単独世帯の増加は避けて通れません。それに伴い、ショートステイでの看取りニーズも高まるでしょう。無理だと決めつけず、まず「どうすればご利用者の希望に応えることができるのか」を考えることが大切です。もちろん、当施設ができることには限りがあります。ご利用者に心から満足していただくためにも、より一層「ご家族や医師・ケアマネジャーたちとの連携を強めていきたい」と思っています（井上施設長）